

生の哲学の「二重の顔 (Doppelantlitz)」の問題

—デイルタイの哲学的思考の特徴について—

瀬戸口 昌也

はじめに

デイルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833—1911) の哲学は「生の哲学 (Lebensphilosophie)」として特徴づけられるが、その内容は多岐にわたり、その最終的な全体像を把握することは難しい。なぜならデイルタイ自身、哲学の体系性を最初から明確に意図して研究を進めていったわけではなく、個々の研究を通して哲学の本質と体系性についての考察を深めていったからであり、しかもこれらの研究の中には、中断したり未完成にとどまっているものも多いからである。しかしながら、デイルタイが70歳になった時の次の言葉は、彼の哲学の目標と意図を知るためのひとつの手がかりになるものと思われる。「歴史的意識が最後まで一貫して追及されれば、一見して相容れない対立が生じる。宗教であれ、理想であれ、あるいは哲学的体系であれ、歴史的現象のすべてが有限なものであること、それゆえ人間が事物の連関を把握する仕方がすべて相対的なものであること、このことが歴史的な世界観 (Weltanschauung)、すなわちあらゆるものは流れゆく過程の中にあり、とどまることがないということの最終的な言葉である。それに対して普遍妥当的な認識への思考の欲求と、哲学の努力が生じる。歴史的な世界観は、自然科学と哲学が引きちぎることのできなかった最後の鎖から、人間の精神を解放するのである。しかしこれらの信念が無秩序になる恐れを克服する手段は、どこにあるのだろうか。このことにつながる一連の諸問題を解決することに、私は終生取り組んできたのであった。目標は見えている。もし私が道なかばにとどまることがあれば、その時には私の同行者や弟子たちがこの目標に到達してくれることを願おう」(V 9)⁽¹⁾。

デイルタイのこの言葉によれば、「歴史的意識に基づく世界観の相対性」と「世界の普遍妥当的な認識」の対立の克服——このことがデイルタイが終生考え続けた問題であり、彼の生の哲学の根本問題であったと言える。それではデイルタイは、この問題を最終的に克服しえたのだろうか。あるいは彼が言っているように、もし道なかばにとどまったとすれば、どの程度この目標に近づきえたのだろうか。このことについては、さまざまな見解がある。例えばガーダーマーは、デイルタイの生の哲学の出発点 (世界観の歴史的相対性) と、精神科学の認識論的基礎づけ (世界の普遍妥当的な認識) はデイルタイの哲学の中で一致していないと批判して、デイルタイの認識論に「解決されていないデカルト主義」を見い出している⁽²⁾。しかしこの批判に対してボルノウは反批判を行い、デイルタイ後期の哲学の展開はまさにこの「デカルト主義的残余の克服」にあったとしている⁽³⁾。またハーバーマスは、デイルタイは後期の解釈学における理解の中に、ハーバーマスの言う「認識を導く実践的認識関心 (praktisches Erkenntnisinteresse)」を見い出しながらも、結局デイルタイはこの認識関心と精神科学の客観性の問題を切り離してしまっているとして批判している⁽⁴⁾。デイルタイの哲学に対するこのようなさまざまな見解は、デイルタイの哲学を評価

することが難しいものであることを物語っている。そこで本研究は、デイルタイが先に挙げた生の哲学の根本問題をどのように展開していったのかを、彼の哲学の代表的な業績である世界観学と精神科学の基礎づけに即して考察してみたい。これらを取り上げるのは、世界観学が歴史的意識における世界認識の相対性の問題を、また精神科学の基礎づけが世界認識の普遍妥当性の問題を、それぞれ取り扱っているからである。考察を進める中で両者の関係が明らかになるとともに、デイルタイが晩年に、彼自身の哲学の目標にどれだけ到達しているかが明らかになるだろう。

I デイルタイの哲学の出発点

デイルタイはすでに青年期から哲学に関心があったが、この関心がプロテスタント神学に由来していることは注目に値する。デイルタイの直弟子であり、娘婿でもあるゲオルグ・ミッシュユによれば、デイルタイにとって哲学と宗教との関係について考えることは、カントによって確実に対立的なものとなった人間の理性の二つの側面—科学的な「理論理性」と倫理的で宗教的な「実践理性」—との対立を克服し、倫理学と宗教を科学的な知識によって基礎づけることを意味していたのである (V, XXII)。デイルタイのこの哲学的関心は、晩年までデイルタイの哲学的モチーフとなっている。それは例えば、70歳になった彼の次のような言葉からも明らかであろう。「ひとつの災いに満ちた古い結びつきがある。哲学者は普遍妥当的な知を求め、それによって生の謎に決断をもたらそうとする。この謎は、解き明かさなければならない。その時哲学は、二重の顔を示す。消し去ることのできない形而上学的衝動は、世界と生の謎を解き明かそうとする。この点で哲学者は、宗教家や詩人と同族である。しかし哲学者は、普遍妥当的な知によってこの謎を解き明かそうとする。このことによって、彼らから区別されるのである。この古い結びつきは、今日のわれわれにとって解決されなければならないものである」(VIII 224, Vgl. VIII 161)。

ここでデイルタイは、生の哲学が「二重の顔」——生と世界全体の意味や価値や目的を求め、理想を追求していく「形而上学的衝動」と、そのための「普遍妥当的な知」の追求——を持つと表現しているが、このことは生の哲学において形而上学的衝動と普遍妥当的な知の要求が同時に現れること、そしてこの両者の関係が解明さなければならないことを意味している。この哲学の二重の顔の問題が、冒頭で述べたデイルタイの哲学の根本問題の別の表現であることは明らかである。ここで次のことが言える。つまりデイルタイの生涯にわたる哲学の個々の研究は、哲学の二重の顔のそれぞれの側面から動機づけられた個別研究なのであり、アプローチの方向は違っても最終的にはこれらの研究は、生の哲学全体の体系としてまとめられ、生と世界についての知の理論として基礎づけられるはずだったのであるということ、それゆえ世界観学は、形而上学的衝動の結果である歴史的形而上学についての批判から、世界についての知の哲学的基礎づけへと向かっていったと考えられ、他方精神科学の基礎づけは、普遍妥当性を目指す精神科学の認識批判から、世界についての知の哲学的基礎づけへと向かっていったと考えられるということである。以下においてわれわれは、デイルタイの世界観学と精神科学の基礎づけ双方から、デイルタイが目指した生の哲学の基礎づけへと迫っていきたい。その際デイルタイの哲学的思考の展開と発展の順序に即して、まず中期に体系的な構想を持って始められた精神科学の基礎づけから考察を始めることにする。

II 精神科学の普遍妥当的な認識の基礎づけ

デイルタイの精神科学の基礎づけの体系的な構想は、『精神科学序説』(1883年、以下『序説』

と略記)から始まるが、その中で彼は精神科学の基礎づけの必要性を次のように述べている。すなわち歴史的世界の認識は、個々の文化体系や社会的組織についての科学(精神科学)の中で行われる。しかし個々の精神科学によって解明される人間や社会についてのさまざまな概念や命題は、その科学が扱う特定の領域にのみ妥当するものである。この意味でこれらの概念や命題は、われわれが生活している現実全体に対しては「部分的内容」であり、「現実からの抽象」にすぎない。したがって個々の精神科学が明らかにしたこれらの概念や命題相互の関係を考察するとともに、それらが現実全体に対してどのような関係にあるのかを考察しなければならない。このことから、哲学が精神科学に対して果たすべき、次の二つの課題が生じる。ひとつは精神科学の知それ自体の「認識論的基礎づけ」であり、もうひとつは精神科学の個別的な知を論理的にまとめ、歴史的社会的現実全体の認識を基礎づけていくことである⁵⁾。哲学のこれらの課題を、デイルタイは「歴史的理性批判(Kritik der historischen Vernunft)」と呼んでいる。「これらの前提から、精神科学の認識論的基礎づけを展開するという課題、そしてそこでつくられた手段を手がかりに、精神の個別科学の内的連関、それらの認識が可能となる境界、ならびにそれらの真理相互の関係を規定していくという課題が生じる。これらの課題の解決は、歴史的理性の批判、すなわち人間自身を認識し、人間によってつくられた社会と歴史を認識する人間の能力の批判として特徴づけられる」(I 116)。

デイルタイはまず精神科学の認識論的基礎づけについて歴史的考察を行い、歴史学派が歴史科学の基礎を形而上学や自然科学から解放することには貢献したけれども、次のような限界を持っていたと述べる。「歴史的現象についての歴史学派の研究とその活用に欠けているのは、意識の事実(Tatsache des Bewußtseins)の分析との連関であり、それゆえ最終的に唯一確実な知への基礎づけであり、要するに哲学的基礎づけである。認識論や心理学との健全な関係が欠けていたのである」(I, XVI)。ここで言う「意識の事実」とは、デイルタイによって「現象性の命題(Satz der Phänomenalität)」(V 90)とも呼ばれるもので、彼の認識論の出発点をなすものである。すなわちデイルタイによれば、認識の根源はすべての対象や事物が、わたしにとって直接的に与えられているという「内的経験」の意識に求められる。この意識の事実の分析が、精神科学の認識論の中心となる。しかしこの認識論は、次の点でそれまでのロックに代表されるような「経験論的認識論」やカントの認識論とは区別されるのである。すなわち認識を単なる人間の思考活動にのみ限定して説明するのではなく、人間の感情や意志を含めた人間の「本性全体」から説明しようとする点である(それゆえデイルタイは従来の意味での「認識論」と区別するために、「自己省察(Selbstbesinnung)」という言葉を用いている)。したがってデイルタイにとって認識論は、必然的に人間の思考や感情や意志活動の連関全体—人間の「心的生(Seelenleben)」全体—を扱う科学、すなわち心理学へと向かっていくことになる。デイルタイにとって心理学は、精神科学の中で「第一の最も基本的な科学」(I 33)として、人間の心的生全体の記述分析をその課題とし、そこで把握された心的生の「構造連関(Strukturzusammenhang)」から、個々の精神科学における認識やさらに現実全体の認識がどのように成立してくるのかを考察することが、精神科学の認識論の課題となるのである。デイルタイの言う「認識論や心理学との健全な関係」とは、このことを指している。

デイルタイのこのような精神科学の認識論的基礎づけの構想の詳細は、計画中の『序説』第2巻の中で展開される予定であったが、しかし第2巻は完成されることなく未刊に終わっている。しかし残された草稿から、その断片はうかがい知ることができる。この草稿は全集第X IX巻にまとめられているが、そこに所収された『プレスラウ草稿』は、デイルタイの認識論が、意識の事実の分析に始まり、外的知覚と内的知覚の考察に向かい、そこからさらに思考の形式の考察(「精

神科学の論理学」)へと向かっていったことを示している。またデイルタイの心理学は、後に独立した論文『記述的分析の心理学論考』(1894年)に結実している。デイルタイはここで、認識論と心理学との関係について次のように述べている。「心的連関は、認識過程の基礎を形成する。それゆえ認識過程は、ただこの心的連関においてのみ研究され、その能力にしたがってのみ規定されうる。ところでわれわれはすでに、心理学的方法的優位を次の点に見てきた。すなわち直接に、生き生きと、体験された実在性 (Realität) として、心的連関が心理学に与えられているという点である。心的連関の体験が、精神的、歴史的または社会的な事実のあらゆる把握の基礎となっている」(V151)。ここで注目されるのは、心的連関が「体験された実在性」として与えられているというデイルタイの言葉である。彼によれば認識論は心理学によって基礎づけられ、それゆえ認識論の出発点である意識の事実は、心的連関として体験される実在性であるということになる。このような意識の事実の諸前提となっている心的連関の構造を記述分析することが、記述的分析の心理学の目的となるのである。

Ⅲ 世界観学の端緒

ここでデイルタイが『序説』第2巻の構想を進めていく中で、彼の哲学のもうひとつの動機づけである形而上学的衝動が、どのように展開されていくのかを見ておきたい。デイルタイ中期における哲学に関する著作を見ると、彼の哲学の関心は『序説』構想下にあって、認識の普遍妥当的な基礎づけにあったことがわかる。デイルタイによれば、哲学は「認識の学」として、「分解し、分析することによって、そこにあるもの、つまり意識の事実の下に見出されるものを個々に示し、まとめることができるだけ」(Ⅷ172)であり、つまり哲学は個々の精神科学の知に基づき、それらを連関づけ、この連関を普遍妥当的なものへと高めていくものとされている。デイルタイはこのような前提の下に、哲学の体系的基礎づけを試みているが、その内容は例えば、デイルタイがユーベルヴェークの『哲学史要綱』のために起草した草稿(Ⅷ176-184)を見ると、哲学を基礎づけるものとしての認識論と論理学、方法論、「生の範疇 (Lebenskategorie)」、外界の実在性の問題などに触れており、これらはすべて『序説』第2巻の構想に対応していることが分かる。つまりデイルタイは、精神科学の認識論的基礎づけから、哲学全体の知の基礎づけへと進もうと意図していたことが分かるのである。

しかしその一方でデイルタイは、このような哲学の認識論的基礎づけに加えて、哲学の体系の「第1部」ないし「最初の課題と準備的部分」として、哲学史を扱う必要性を挙げている。なぜなら哲学史は、各時代や時期のそれぞれにおいて、世界の認識の仕方や意味や価値、あるいは理想が普遍妥当的な形で高められて現れたものだからである。「人間の構造の内に置かれ、今やまたある時代の構造をも作り、現実の認識から価値賦与と理想を経て目的設定へと拡大していく連関を、その時代の哲学的諸体系は、最高に到達可能な普遍妥当性の段階へとまとめるのである」(Ⅷ176)。ここにわれわれは、後のデイルタイの世界観学への端緒を見ることができよう。デイルタイはすでに青年期から世界観への関心を持っていたが(V、VI)、彼の哲学史に対する「特別な愛着」(I、XX)の中で、この関心は後に世界観学へと結実していったと考えられる。

しかしここで哲学の体系的基礎づけにとって、困難な問題が生じる。哲学史は特定の時代の現実認識や価値や理想、目的が歴史的に相対的なものであることを示す。この歴史的相対性の中では、認識は普遍妥当性を目指しても、結局は主観性へと後戻りすることになる。「ある民族やある時代の哲学それぞれは、ある生の関係 (Lebensbezug) を際だたせ、そこから出発し、そこへと帰属する。そしてこの連関はまず客観性として強調されるが、やがてその継ぎ目や裂け目が洞

察されてくることで、主観性へと後戻りすることになる」(VIII186)。ここには前述した、生の哲学の「二重の顔」の問題が生じていることが分かる。デールタイは哲学の体系的基礎づけの試みを通して、生の哲学の二重の顔－歴史的世界の認識の相対性と普遍妥当性の対立－に直面しているのである。

デールタイはここでこの対立の克服の道の端緒を、「生の連関 (Lebenszusammenhang)」に見出ししている。生の連関とはデールタイによれば、歴史的世界の認識のための条件となるものである。「体系的哲学の基礎づけは自己省察、つまり意識の諸条件の認識であり、この諸条件の下で普遍妥当的な諸規定によって、したがって普遍妥当的認識や普遍妥当的価値規定、そして目的行為の普遍妥当的諸規則によって、精神がその自律性へと高まるのである。この諸条件は生の連関の中に与えられており、この諸条件が最終的な条件となるのは、生を条件づけている他の事実すべてが、生の連関においてその統一を得るからである」(VIII188f.)。デールタイによれば、人間はその生涯において、さまざまな事物や他者とかかわりあいながら自己の生を形成していく。このかかわりあい(「生の関係 (Lebensbezug)」)において、個人は内面的には思考や感情や意志の活動によって外的な世界を認識し、そこへと働き返していく。このような働きかけの行為がさまざまに結びつき、作用することによって、やがて社会的組織や文化が生まれ、歴史的世界が形成されていくのである。このように人間の生は、すべて連関として把握されるのであり、このような連関をデールタイは「生の連関」と呼ぶのである (Vgl. VII131f.)。それゆえ人間の世界認識や、感情や意志の活動、さらにはそこから形成された歴史的世界は、すべて生の連関の中で捉えられ、統一を得ることになる。このような観点からデールタイは、哲学は生の連関の純粋な記述分析へと向うものとし、具体的にはこの分析は次の3つの部分的な連関へと向かうとする (VIII189)。

1. 普遍妥当的な知の諸条件の連関、2. 記述的分析の心理学の連関、3. 歴史的世界の連関。

われわれは先に、デールタイが行った精神科学の認識論的基礎づけについて、デールタイが意識の事実の分析から記述的分析の心理学へと向かい、心的構造の連関の把握へと進んだことを明らかにした。そして今やここでは、心的構造の連関は生の連関の一部として機能していることも明らかとなった。これまでの考察を、生の哲学の二重の顔の問題に即してまとめれば、次のようになる。生と世界についての知の普遍妥当的な基礎づけは、心的構造の記述分析を要求する。他方歴史的意识に基づく哲学史の体系的考察は、歴史的世界の連関の記述分析を要求する。そして心的構造も歴史的世界も、ともに生の連関の一部として機能している。そうだとすれば哲学の体系的基礎づけは、心的構造の記述分析だけでも、歴史的世界の連関の記述分析だけでも不十分であり、両者の根底にある生の連関そのものの記述分析へと進まなければならない。すなわち生の連関が、人間の心的生を通していかにして対象化され、普遍妥当的知として、歴史的世界の連関を形成していくのかということが考察されなければならないのである。

VI 体験と意識

デールタイのこのような哲学の体系的基礎づけの試みは、後期の著作『精神科学の基礎づけのための諸研究』(1905年、以下『諸研究』と略記)へと継承されている。この研究は後の『精神科学における歴史的世界の構成』(1910年、以下『構成』と略記)の予備研究とも言えるものであるが、しかしデールタイ自身が言うように、ここで扱われる内容は「哲学の基礎づけの全領域から、精神科学の基礎づけを満足させるような諸命題の連関を選び出し」(VII4)たものであり、その意味でこの研究は、哲学の基礎づけの一部を成し、哲学の「知の理論」の研究と見なすこと

ができる。この研究の冒頭でデイルタイは、哲学的思考の特徴を次のように述べている。「思考は生の諸々の実在性に関して、それらが意識される (Bewußtwerden) エネルギーを高めることができるだけである。体験されたものと所与のものに、内的な強制によって思考は拘束されている。そして哲学とはただ、あらゆる意識についての意識およびあらゆる知識についての知識として、意識的になること (bewußt zu machen) の最高のエネルギーである。このようにして哲学は結局、思考が諸形式と諸規則に拘束されていることを問題とし、他方思考を所与へと拘束している内的な強制を問題とする。このことが哲学的自己省察の、窮極で最高の段階である」(Ⅶ 7)。

デイルタイはここで哲学を、生に対して「意識的になる」思考活動のエネルギーと見なしている。それは「意識についての意識」あるいは「知識についての知識」として、結果的に思考活動そのものの反省へと向かう。この思考活動は所与のものと体験に拘束されており、また思考の形式や規則にも拘束されている。これらの関係を考察することが、哲学的自己省察の最高段階であるとするのである。つまりここで問題となるのは、簡潔に言えば体験と思考、思考とその諸形式の連関なのであり、この連関を心的構造に基づいて純粹に記述分析することが、この研究の中心となっている⁶⁾。そしてこの記述分析によって、哲学と精神科学の知の「客観的妥当性 (objektive Gültigkeit)」(デイルタイはもはや知の「普遍妥当性」という言葉を使わずに、知の「客観的妥当性」とか「客観的必然性 (objektive Notwendigkeit)」という言葉を多用している) が理論的に基礎づけられるとしている。このような知の理論は、哲学の基礎づけの根幹を成すものであるが、しかし哲学的自己省察の作業はこれだけに終わるものではない。先の引用に続けてすぐ、デイルタイは次のように述べている。「知の問題がこのような範囲で把握されるならば、知の理論におけるその解決は哲学的自己省察として特徴づけられる。そしてこの自己省察がまず、哲学の基礎づけの部分のもっぱらの課題となるであろう。この基礎づけから諸科学の百科全書が生じ、また世界の見方 (Weltansicht) についての説が生じてくる。そしてこれら双方において、哲学的自己省察の作業が完成されるのである」(Ⅶ 7)。ここでデイルタイは、このような哲学の基礎づけとしての知の理論が「諸科学の百科全書」と「世界についての見方の説」へと展開され、双方によって哲学的自己省察は完成されるとしている。「諸科学の百科全書」とは、デイルタイが中期から構想してきた精神諸科学の連関づけを意味し、「世界についての見方の説」とは哲学のもうひとつの端緒である世界観学を意味している。中期以来対立してきた精神科学と世界観の基礎づけの問題は、後期の『諸研究』で知の理論として深められ、その成果は『構成』だけでなく、『世界観学』へも展開されていくものと考えられる。

それではデイルタイは『諸研究』において、知の基礎づけの問題をどのように展開しているのだろうか。彼によれば体験と思考、思考とその諸形式の関係は、「対象的把握 (gegenständliches Auffassen)」という観点から記述分析される。対象的把握とは「対象的なものがそこにあるという意識の仕方 (Bewusstseinsweise)」(Ⅶ 25) であり、これはある対象の認識過程において現れる一連の心的事態として意識されるものである。この心的事態は例えば、知覚、表象、記憶、命名、概念、判断、推論、感情、意志など思考に伴う認識の諸要素や思考の諸形式として表され、それぞれが「ある内容的なものについての一定の意識の仕方」(Ⅶ 25) として、体験されるものであるとデイルタイは言う。そしてこれらが実在性を持って確かなものとして意識されるのは、これらすべての内容が体験されたものに基づき、その体験をそれぞれが「代現 (Repräsentation)」しているからである。「ある心的事態に注意を向けること、この事態の観察、心的連関におけるこの事態の把握、把握されたものについての判断、そして最終的には心的連関についての知識の体系的統一—これらさまざまな把握の仕方は、それらが体験と一致する限りすべて実在性を現す。なぜならわれわれが取り扱うものはどこでも、体験されたものの諸々の代現にすぎないからであ

る。同様に心的連関の概念がある実在性を示すのは、この連関が生じた諸々の代現が、疑いのない仕方では体験の中に含まれている限りにおいてである」(Ⅶ32)。このことから、認識を基礎づけている心的連関は体験に基づいているのであり、この心的連関は体験の諸々の代現作用が疑いなくもとの体験と一致している場合に初めて、実在性を持つことが分かる。ディルタイは先に『記述的分析の心理学論考』において、認識の出発点である意識の事実は、心的連関として体験される実在性であると述べていたが、ここでは意識の事实在対象的把握として、体験との関係からさらに詳しく考察されていることがわかる。ディルタイにとって意識は体験に基づいているのであり、意識は体験の個々の代現として生じてくるものとして捉えられている⁽⁷⁾。

しかしここで、次のような問題が生じる。第一に体験が認識の根源であるとするれば、体験それ自体が実在的なものであることは、どのようにして確証されるのか。第二に心的連関の把握において、ディルタイが体験の代現作用とする認識の諸過程の内容が、もとの体験と疑いなく一致していることはどうして分かるのかという問題である。

第一の問題については、ディルタイは次のように考えている。体験とはある態度の在り方とその内容が直接に与えられている状態であり、例えば私があることに対して苦痛を感じたり、またあることに欲望を感じたりすることはすべて体験として把握される。この場合これらの苦痛や欲望は、私に対して直接に与えられているのであり、苦痛や欲望を感じている状態にあっては私はこれらの感情と一体となって存在している。「ある感情は、それが感じられている限り存在し、それが感じられている通りに存在する。すなわちその感情の意識とその状態、その感情が与えられていることとその実在性は、たがいに異なったものではない。われわれに対してそこにあること、われわれに与えられていること、あるいは意識の事実であること—これらはみな同じ事態に対しての異なった表現にすぎない。この事態にあっては把握作用に客観は対立せず、客観と把握作用に与えられている事実はひとつである」(Ⅶ27)。すなわち体験にあっては、体験される内容と体験する自己とはまず一体となって意識される。体験された内容が思考によって対象化され、主観と客観の分裂が生じるのは、その後である。体験のこのような状態を、ディルタイは「覚知(Innewerden)」と呼んでいる。ディルタイにとって体験とはまず覚知されるものであり、それゆえ「直接的で確実なもの」(Ⅶ26)として特徴づけられるのである。

第二の問題についてはディルタイは、すべての代現作用が「それが正しく遂行される限り」(Ⅶ27)は実在的なものを示すとしている。代現が正しく遂行されるとは、個々の代現が体験の内容に即してひとつの連関を形成していくことを意味している。ある対象についての知覚や表象、概念、推論、判断等はすべて同一の体験の内容を一部代現している。さらにこれらの代現は、たがいに作用することによって、ある代現が別の代現に対して、代現されあるいは代現するという関係にある。このような「代現されるものと代現するもの」という関係は、ディルタイによれば「基礎づけるものと基礎づけられるもの」という関係として捉えられ(Ⅶ44)、このような代現作用の記述分析を通して、心的連関全体の構造が基礎づけられるとするのである。

しかしこのような基礎づけには、始めから困難が伴っている。と言うのは、心的連関における代現作用の記述分析は、「究めがたい体験を汲み尽くし、こうして体験についての言明と体験それ自体とを同じにする」(Ⅶ29)努力であるが、すでにディルタイが前提しているように、体験それ自体が「究めがたい」ものであるため、その内容を完全に代現することは困難となる。心的連関において、ひとつの体験は別の体験へと次々と連関していくのであり、この過程において体験の代現作用は、ますます複雑で錯綜したものになっていく。体験の代現の過程は一時的な満足をもたらすことはあっても、完全な満足を持って終わることは決してない。われわれが自己の体験を概念化し、それに対して判断することで満足を得ようとしても、常になにか不満足さが残る

のは、体験のこの究めがたさに由来している。「心的連関に向けて体験を充足させていくことは、そのつど把握された体験の内容を越えて前進する法則性に基礎づけられている。この前進は事態に条件づけられており、この事態の一步一步にある満足が伴っているが、この満足は、体験の汲み尽くしがたさから生じる不満足さに繰り返して代わられる」(VII29)。こうして心的連関の把握は、「ひとつの際限のない課題」(VII32)となる。

ところでデイルタイは、この「前進する法則性」に二つの方向性を見出している。ひとつは同一の対象についてのさまざまな体験を連関づけ、その対象をより適切な代現の連関によって完全に捉えようとする方向である。もうひとつの方向は、異なった対象についての体験をたがいに連関づけようとする方向である。デイルタイは前者を、体験の対象への「深化 (Vertiefung)」と呼び、後者を体験の「普遍的な拡大 (Ausbreitung)」と呼んでいる (VII 127, Vgl. VII 37・41)。われわれが特定の対象についての把握を完全なものにしようとするのなら、同一の対象についてのさまざまな体験を連関づけ、この連関から対象を把握するにふさわしい一般的な名称や概念を与え、対象について判断を下すことになる。このような体験の深化は、ある対象についての個々の体験を一般的なものへと連関づけていく作業であり、このような一般化は特定の対象についての体験から、さらに別の対象についてのより広い体験の連関へと進んでいく。こうして体験の対象への深化は、体験の普遍的な拡大へと移っていく。両者は相互に依存しあうのであり、この依存関係において特定の対象領域と、この対象領域における個々の体験の一般的な連関が形成される。このように、体験の前進する法則性に基づいて対象性の領域は広がっていき、個々の精神科学の対象領域とその体系的内容は、この過程において決定される。「あらゆる科学は、境界づけ可能なある対象性へと関係づけられており、この対象性において科学は統一を持つ。そして科学の領域の連関は、科学の知識の諸命題を全体へと帰属させる。体験されたものあるいは直観されたものに含まれている諸関係のすべての完成は、世界の世界概念であろう。この世界の世界概念で言い表されているものは、体験可能なものや直観できるものすべてを、そこに含まれている事実性の諸関係の連関によって言い表そうとする要求である」(VII41, Vgl. VII129)。デイルタイのこの言葉は、次のことを意味している。ひとつは精神科学における対象の規定は個々の体験に基づき、その対象領域は明確に始めから規定されているわけではなく、体験の一般化によって定められていくものであるということ。それゆえもうひとつは、個々の精神科学の対象領域は体験可能であり、この体験においてそれぞれの領域が相互に連関しあい、これらの連関が全体として完成されたものが、世界と呼ばれる連関であるということである。このような世界の連関を完成させていくことが哲学の課題であったが、このことが可能なのは、精神科学の知が体験に基づいているからである。

ここにおいてわれわれは、後期デイルタイにおいて体験の意味が拡大されて用いられていることに気づく。体験は中期においては、単に意識の事実として実在性の根拠とされていたが、ここでは体験は心的連関の個々の機能によって部分的に代現されるとともに、全体として心的連関の諸機能を統一するものとして捉えられ、さらに精神科学や世界の連関の統一の出発点となるものとして捉えられている。われわれは先に、デイルタイは人間の生をすべて連関として捉え、この連関を生の連関として特徴づけ、心的構造も歴史的世界もすべてこの生の連関の一部として機能していると考えていると述べた。この生の連関は、体験において構造的な中心点を持つとすることができる。

V 精神科学の成立基盤としての生活経験

これまでの考察において、デイルタイは歴史的世界の客観的認識の基礎を、体験に求めていることが明らかになった。この体験からいかにして確実な対象的把握が生じてくるかについては、心的構造の記述分析が必要とされたが、デイルタイはこの困難な心理学の道をこれ以上進まずに、『構成』においては別の道を取っている。それは解釈学的方法の道であり、そこでは『諸研究』において意識的に除外された⁽⁸⁾体験と理解の関係が取り上げられている。デイルタイによれば、体験はそもそも個人的なものであるが、この個人的な体験から精神科学の個々の対象が生じ、それぞれの対象領域が拡大し、歴史的世界を構成していくことができるのは、理解によるとして。「理解が個人的体験の制限を初めて解き、そしてまた個人の諸体験に生活経験 (Lebenserfahrung) の特徴を与える。理解がより多くの人々と精神的創造物や共同体へと拡大するにつれ、理解は個人的体験の地平を拡大していくのであり、そして精神科学においては共通的なものを通じて一般的なものに至る道を切り開いていくのである」(VII 141)。ここでは体験と理解、生活経験、精神科学の関係が簡潔に述べられているが、これらの関係は詳しく言えば、次のようになる。個人が自己の生涯の中で体験するさまざまな人物や事物、出来事などは、時間の経過の中で積み重なり、「個人的生活経験」となる。この個人的生活経験が言語で表現され、ある一定の態度に対する一定の表現として特定の範囲の人々に理解され、社会的に共有され、歴史的に継承されていくと「一般的生活経験」となる。一般的生活経験とは、デイルタイによれば「何かある範囲にたがいに属している諸個人によってつくられ、彼らに共通な諸命題」(VII 133) のことであり、それは例えば生活についてのさまざまな格言や処世訓、習慣や伝統、世論などとして現れるものとされる。このような諸命題は、これらに属する事例の数が多ければ多いほど、帰納的にその「確実性 (Sicherheit)」を増大していくとされるが、しかしこの確実性はその成立上、自然科学の「普遍妥当性」とは明確に区別されなければならないものとされる⁽⁹⁾。

デイルタイによれば、一般的生活経験はその歴史的継承の中で個々の文化体系や社会組織の基盤となり、人間の歴史と社会を形成していく。それゆえ精神科学の対象領域やその諸命題は、すべて一般的生活経験に基づいている。精神科学はその個々の対象の理解を通して、このような生活経験の連関を明らかにし、その連関を個人的なものから一般的なものへと拡大していくのである。こうしてデイルタイは、次のように言う。「生と生活経験と精神科学は、このように絶えず内的連関を持ち、相互関係にある。」(VII 136)。ところでこの生活経験は歴史的制約を受けるので、その確実性は先にデイルタイ自身が述べていたように、自然科学の普遍妥当性とは明確に区別されなければならない。ここでデイルタイは、ふたたび生の哲学の二重の顔の問題に直面することになる。すなわち歴史的制約を受ける生活経験を基盤とする精神科学は、いかにして客観的な認識を得ることができるかという問題である。デイルタイはこの問題に対して、明確な答えを出している。「これらの諸科学における矛盾を解消するための原理を、私は歴史的世界をひとつの作用連関 (Wirkungszusammenhang) として理解することの中に見出す。この作用連関は、それ自体の中に中心を持つが、それはこの作用連関に含まれている個々の作用連関が、価値を定めそれを実現することによって、その中心を持つてはいるが、しかし構造的にひとつの全体へと結びつけられていることによってである。この全体において、個々の部分の有意義性から、歴史的社会的世界の連関の意義が生じる。したがって、価値判断や未来に方向づけられた目的設定はすべて、ただこの構造連関に基づいていなければならない」(VII 138)。個々の精神科学の領域における対象の理解は、その対象領域における生の連関の構造を明らかにする。これらの連関は、それ自体でひとつの構造連関として意味を持ち、価値を定め、目的を内在するものであるが、それぞ

れの連関はさらに大きなひとつの構造連関を形成し、たがいに作用しあっているとされる。生の連関の持つこのような特徴を把握するために、デルタイは「作用連関」という生の範疇を用い、精神科学の認識の客観性はこの作用連関の「構造法則」(VII185)に基づいていると述べるのである。

VI 世界観の成立基盤としての生活経験

ところで生活経験は、デルタイにとって精神科学の成立基盤であるだけでなく、世界観の成立基盤にもなっている。彼は『構成』とほぼ同時期に出版された論文『形而上学的諸体系における世界観の諸類型とその成立』(1911年、以後『世界観学』と略記)において、世界観の諸類型の分類を行っているが、その冒頭部分で世界観の窮極の根底は生であり、この生についての熟慮から生活経験が生じるとしている。『構成』においては、生活経験は個々の精神科学の特定の対象領域へと進んでいくのに対し、『世界観学』では生活経験は生の全体像へと進んでいく。生活経験から個々の精神科学へと進む道は、生の一部を明白なものにするのに対して、生活経験から生の全体へと進む道は、生を謎に満ちたものとする。「全体へと向けられた把握に対して、変転する諸々の生活経験から、次のような生の諸相が生じる。すなわち[生は]矛盾に満ちて生き生きとしており、同時に法則や理性や恣意でもあり、常に新たな側面を示す。こうして[生は]個々においてはおそらく明白かもしれないが、全体においてはまったく謎である。生の諸関係とそこに基礎づけられた諸経験を、心意はひとつの全体へと連関づけようとするが、それを果たすことはできない」(VIII80)。デルタイによれば、生活経験は生に対する個人の一般的な「気分(Stimmung)」を産み出し、この気分を根底として心的生の構造は、個々の個人的な生活経験を解釈し、一般的で全体的な生活経験へと連関づけようとする。このような試みが繰り返されることによって、心的生の構造に基づいた世界の見方の諸類型(世界観)が形成される。これらの世界観によって、生の謎に対する解明が試みられるのである。このためにデルタイが手がかりとした世界観は、宗教と文芸と歴史的形而上学における世界観である。精神科学が生の部分的な対象領域の連関の理解に従事するのに対し、これらは皆始めから、生全体の意味理解を問題にし、それを宗教的教義や芸術的作品や科学的命題へと客観化するからである。

こうしてデルタイは、宗教と文芸と歴史的形而上学それぞれの領域において、それぞれの世界観の諸類型とその発展を歴史的に考察している。しかしわれわれがここで留意しなければならないことは、ミッシュが言うように、デルタイの世界観学は確かに彼の後期の哲学的思考の中で重要な位置を持つものであるが、しかしデルタイの哲学全体を言い表すものでは決してないということである⁽⁴⁰⁾。ミッシュによれば、デルタイの世界観学はその影響力も大きかっただけに、デルタイの世界観の分類ばかりが彼の哲学的業績として有名になっているが、デルタイの意図はそもそも世界観の分類にあったのではなく、世界観の類型によって生や歴史全体の意味理解を深めることにあったのである。デルタイ自身が明言しているように、世界観の類型はあくまで「暫定的なもの」であり、「歴史的により深く見るための補助手段」(VIII86)にすぎない。

そうだとすれば、われわれはデルタイの意図にしたがって、彼の世界観学が彼の哲学全体の中でどのような位置づけにあるのかを考えてみなければならない。デルタイは歴史的考察から、宗教と文芸と歴史的形而上学それぞれの領域において、さまざまな世界観が歴史の中で生じ、それぞれが普遍妥当性を目指して発展し、対立し、この争いの中で淘汰されてきた、と言う。このように世界観は個々に対立を繰り返しながらも、その根源を生に持つことでは共通している。「ある類型の個々の段階とその特殊な形態化は反駁されても、しかしそれらの根源は生の中で持続し、作用し続け、常に新たな形態をもたらし」(VIII87)。このことは個々の世界観の根底には、

持続的に作用し、新たに形態化していく生の連関が作用していることを意味している。そしてデイルタイは生の連関のこのような側面を、「作用連関」と呼んだのであった。したがって世界観もまた、生の作用連関の産物なのであり、その形態化であり、生の連関の構造全体を把握するための補助手段であると考えられるのである。

そうだとすれば宗教も文芸も歴史的形而上学も、生が歴史的に形態化したものであり、その根源においてそれぞれが生連関の一部として作用し、構造的に統一されることになる。そしてこの統一的機能を果たすものが、デイルタイの言う哲学なのである。「哲学が文芸と宗教と形而上学の偉大な諸現象を実際に満足させるのは、哲学がその窮極的な中心においてそれらを統一的に把握することによってである」⁽¹¹⁾。このようにデイルタイにとって哲学は、作用連関の機能として現れ、この機能の解明が哲学の課題となる。「われわれが歴史的出来事の複雑な連関に直面して途方にくれ、ある構造や規則性や発展がこの連関にあることに気づくことができない一方で、文化のある営みを実現している作用連関のすべては、それ自体の構造を示す。もしわれわれが哲学をそのようなひとつの作用連関として把握すれば、哲学はまず次のような多様な営みとして表される。すなわち世界観を普遍妥当性にまで高めること、知識それ自体の知識についての熟慮、われわれの合目的行為と実践的知識が認識の連関に対して持つ関係、文化全体に現実化している批判精神、総括することと基礎づけることである。しかも歴史的研究は、次のことを示す。われわれが哲学の至る所で関与する諸機能は、歴史的諸条件の下で生じるが、しかし結局は哲学の統一的な営みに基礎づけられているということである。哲学とはこのように、最高の一般化と窮極の基礎づけに向けて、絶えず前進していく普遍的な熟慮なのである」(VII 169, Vgl. V 413ff., VIII 218f.)。デイルタイがここで挙げている哲学の諸機能は、彼が中期以来一貫して追及してきた哲学の諸問題—世界観の形成、知の理論、精神科学の認識論的基礎づけと連関づけ、文化の歴史的発展の諸条件、これらを総括し、基礎づけること—なのであり、これらは後期において歴史的な生の作用連関の機能として把握され、この作用連関において統一されるものとして捉えられていることが分かる。つまり哲学とは、作用連関のさまざまな「機能の総体」(V 413)を指し、これらの機能を総括し、統一することを目指すものである。このことは言い換えれば、哲学が歴史的生の作用連関全体の構造の把握に向けて、その構造の規則性を明らかにし、発展の法則性を明らかにしていくことを意味する。デイルタイはこのような構造連関を「普遍史的連関 (Universalhistorischer Zusammenhang)」と呼び、この連関の把握の方法論的基礎づけを、『構成』の続編の中で展開する予定であったと考えられる。しかしこの続編の計画は、デイルタイの死によって未刊のままにとどまっている。

VII 精神科学と世界観の関係

これまでの考察をまとめてみると、次のようになる。デイルタイは生の哲学の二重の顔の問題を解決するために、一方では精神科学の認識論的基礎づけへと進み、他方では世界観学へと進んだのであった。両者の考察を進めていく中で、デイルタイは客観的な知の基礎を、意識の事実から体験へと深めていく。最初デイルタイはこの体験を、記述的分析の心理学によって、生の連関から認識論的に基礎づけようとした。しかしやがてこの困難を伴う方法から、解釈学的方法へと移っていく。体験は生活経験として表現され、この生活経験は理解によって個人的なものから一般的なものへと拡大していく。体験と表現と理解という解釈学的循環の中で、生活経験を基盤にして精神科学と世界観が生じる。精神科学は個々の対象領域から生の連関の理解を可能にし、世界観はその諸類型において生の連関の理解を可能にする。これらの理解を通して、生の連関は構

造連関として把握され、歴史的生の作用連関全体へと統一される。したがって精神科学における世界の客観的認識も、多様な世界観における世界の歴史的把握も、すべてその根底において作用連関全体の構造法則に基づいていることになる。生の哲学が持つ二重の顔は、晩年のデルタイにおいて、作用連関の概念によって結びつけられているとすることができる。デルタイの哲学のこのような思想の発展は、認識の基礎を心理学的な意識の事実から解釈学的な生の連関へと深めていく過程であり、この過程はボルノウが言うようにまさに「デカルト主義的残余の克服」の過程であったとすることができる。

しかしここで、次のような疑問が生じる。デルタイは作用連関の概念によって、確かに哲学と精神科学、及び哲学と世界観との関係は明らかにしたが、しかし精神科学と世界観との関係については直接には言及していないということである。両者の関係は哲学による統一を前提とするものの、作用連関の部分的機能として述べられるにとどまり、この統一が実際にどのような形でどのような法則性によって行われるのかについては、述べられてはいない (Vgl. VII 169)。このことは言い換えれば、作用連関全体の構造法則の複雑さと、把握の困難さを裏付けているとも言える。個々の精神科学の形成には、ある時代や文化の特定の世界観が作用していることは当然考えられるし、逆に特定の世界観の形成に個々の精神科学は何らかの作用を与えることも考えられる。これらの作用の法則性をすべて明らかにすることは、デルタイ自身が言うように初めから困難なのである⁽¹²⁾。

この作用連関の把握の困難さのゆえに、精神科学と世界観の関係は曖昧なままにとどまり、その結果デルタイの哲学は晩年においても、ミッシュが特徴づけたように、精神科学による普遍的連関の認識を目指す「科学としての哲学」と、世界観の類型による歴史理解を目指す「世界観としての哲学」(V, VIII) とに分裂したままのような印象を受ける。デルタイは作用連関によって、精神科学と世界観の対立を克服できると考えたが、その解決は未決のままにとどまっているのである。それゆえデルタイの哲学が、科学と哲学に分裂しているというガーダマーの批判や、精神科学の客観性と理解における実践的認識関心の関係が曖昧であるというハーバーマスの批判が生じてくることになる。

われわれはここで、デルタイが未決のままに残した問題を考えてみなければならない。この問題は、哲学と精神科学と世界観の関係についての問いであり、この問いについて考えることは、現在ますます多様に議論されている哲学の役割や機能、またその基礎づけについて考える手がかりを与えるように思われるからである。

デルタイは先に引用したように (VII 7)、生の哲学の思考の特徴について、生が「意識される (Bewußtwerden)」ことから始まって、思考によってわれわれが生に対して最高に「意識的になる (Bewußtmachen)」エネルギーであると述べていた。デルタイは別の箇所でも、生の哲学の思考のこのような特徴を「論理的エネルギー (logische Energie)」と表現している。「哲学者はまずは彼の根源的な志向の力において、彼の論理的エネルギーが、世界像や彼の時代を満たしている理想や目的を、明白な意識と連関へと高めようと努力することによって、生の共通の根底へと突き進む。この生の根底と現実の根底を、彼は論理的思考の光で照らそうとする。錯綜した思考が哲学者達をいかに前進させようとも、この最初の関係があらゆる哲学的体系の構造の条件なのである。生および現実の連関と根底を探り出そうとするこの論理的エネルギーは、常に哲学者の中で作用しているものである」(VIII 32)。このようにデルタイにとって論理的エネルギーとは、現実についての一定の世界像や理想や目的を意識へと高め、それらを論理的に連関づけ、生の根底にある連関へと迫っていく力である。このことは歴史的には、哲学者が生理想や目的を求めた衝動を、論理的エネルギーによって形而上学の体系として概念化していく過程として現れる。

このことからミッシュは、デイルタイの言う哲学者の論理的エネルギーを「形而上学的エートスと概念的思考の力との根源的な結びつき」⁽¹³⁾として特徴づけている。

このような哲学者の論理的エネルギーを言い表すのに、デイルタイは生が「意識される」とか、生に対して「意識的になる」とか、生を「意識へと高める」などという表現を用いているわけである。しかしデイルタイにとって「意識」という用語は、生の哲学の認識論的基本概念ではあるが、とりあえず「一時的で気分的な言いまわし」にすぎない、とミッシュは言う。つまりそれは、生の豊かな現象に対しての「解釈学的表現」にすぎないのである⁽¹⁴⁾。ミッシュによれば、デイルタイが生に対する何らかの哲学的態度を表すのに「意識」という用語を用いる場合、そこには次の二つの態度が表現されている。「意識の連続的高まりは、その窮極的な項として哲学的思慮が現れるのであるが、その根底において二重の端緒を持つ。ひとつは、あの回帰的に自らの内に進むこと（*Insichgehen*）であり、これは世界形成と世界の見方を可能にする。そしてもうひとつは反省と疑念の立場であり、[デイルタイによれば]この立場によって、意識は妥当的な知識に達しようと努めるとされる」⁽¹⁵⁾。こうした見解から、ミッシュはデイルタイの生に対する哲学的態度についての表現を、正確に規定し直そうとする。すなわち生が「意識される」とは、生に対する「無反省的で全体的態度」から、生の一定の見方が形成され、生の謎が生じ、生の意味や理想が追求されることである。それに対して生を「意識的なものにする」とは、生に対する「反省と疑念」から、生が客観化されたものすべてを批判的観点の下に置こうとすることである。そしてミッシュによれば、両者は哲学的熟慮を持つ二面性なのであり、生に対する思考活動の中で同時的かつ対立的に生じるものであるとされる。この同時的対立から、哲学的思考が展開されるのである。「しかしながらあの同時的であることの中に、今や知の哲学的運動の問題全体が、すなわち実現を目指して現在化する哲学的運動の問題全体がある。そしてこの問題は、意識されることと意識的になることの対立が、その運動を産み出す対立とは見なされずに、哲学の連続的導出に対応するように、両者の間に一方から他方へと自ら至るようなひとつの移行が置かれる限りは、把握され得ないのである」⁽¹⁶⁾。ミッシュのこの言葉は、デイルタイの哲学的思考の特徴を述べているのであり、つまりデイルタイにおいては生が意識されることと、生に意識的になることとの関係が対立とは見なされずに、容易に段階的移行が可能なものとして見なされているということを描いている。このことは、先に引用したデイルタイ自身の言葉からも明らかであろう。ここでは哲学的思考は、生が意識されることから始まって、生が最高に意識的になるまで高まっていくエネルギーであるとされているのである。

われわれはまたデイルタイの哲学的思考の特徴を、次のように言うこともできる。哲学的思考が論理的エネルギーとして、「形而上学的エートスと概念的思考の力との根源的な結びつき」であるとすれば、デイルタイはこの結びつきを、形而上学的エートスがやがて概念的思考へと段階的に移行するものと捉え、両者の結びつきは最終的に概念的思考によって完成されると前提していたのではないか。デイルタイの哲学的思考の展開を振り返って見ると、彼はまず形而上学批判から出発して、概念的思考の基礎づけを精神科学に求め、作用連関の概念を導出し、世界観も作用連関の一部として、生の連関の構造全体へと統一されると考えていたのであった。しかしミッシュの言うように、哲学的思考が形而上学的エートスと概念的思考の同時的対立から生じてくるものであるとすれば、デイルタイの哲学がたどったこのような道は、一方的に概念的思考へと移行していく「一面的な道」（ミッシュ）であると言える⁽¹⁷⁾。本来哲学の道は、形而上学的エートスと概念的思考の同時的対立から生じる知の運動として捉えられ、この対立から世界観と精神科学は同時的に成長してくる。それゆえ世界観と精神科学の関係について考察するには、両者の成立の起源である形而上学的エートスと概念的思考の対立にまで遡る必要がある。

VIII デルタイ哲学の現代的意義

われわれはここでもう一度、世界観と精神科学の共通の成立基盤である生活経験へとたち帰ってみよう。デルタイは生活経験を、個人的なもの一般的なものとに区別していた。個人的生活経験については、その特徴を次のように述べている。「人間の本性が常に同一であるように、生活経験の基本的特徴もまたすべて共通している。人間の事物のはかなさと、このはかなさの中にあつて時間を享受しようとするわれわれの力。強靱でまた制限された本性にあつては、その実存の確固とした足場を築くことによって、このはかなさを克服する傾向。そして脆弱なあるいは思い悩む本性にあつては、このはかなさについての不満。不可視の世界にあつて、真に永続的なものへのあこがれ。幻想が消滅するまでは、夢のように創造的心像を造り上げる情熱が押し進める力。このようにして、生活経験は個々人において、さまざまに形態化される」(VIII79)。デルタイがここで述べているように、生活経験はまず個人において自己の生のはかなさに対する克服の努力や不満、永続的なものに対するあこがれ、情熱的な想像力などとして意識される。このような態度は、生に対する形而上学的エートスの現れであると言ってよいだろう。それに対して一般的生活経験の特徴について、デルタイは次のように述べている。「一般的生活経験の特徴は、それが共同生活の産物であるということである。そして一般的生活経験は、共同体の生活にも個々人の生活にもかかわる。共同体の生活においては、それは習慣や因襲として、そして個人への適用においては世論として、一般的生活経験はその〔事例の〕数の優位さと、共同体が個人の生を越えて存続することによって、個人およびその個人的生活経験と生活力に、個人の生活意志より通常優勢な力を行使する」(VII133)。このように一般的生活経験は、習慣や因襲や世論として現れ、共同体や個人に影響を与えるものとされる。これらに対して意識的になり、批判することを可能にするものが概念的思考の力であると言ってよい。

デルタイは個人的生活経験と一般的生活経験との関係について、個人的生活経験が一般的生活経験において「是正され、拡大される」(VII132)と述べているが、この是正と拡大は実際には、一般的生活経験が個人的生活経験へと優勢な力を働かせる中で、個人的生活経験が一般的生活経験へと適応していく過程であると考えられる。そしてこの適応を可能にするものが、理解なのである。「理解はある体験を前提とし、理解が体験の狭さと主観性を越えて、全体的なもの一般的なものの領域に至ることによって、体験は初めて生活経験となる」(VII143)。ところでデルタイは理解を、二つの形式に分けて考えている。ひとつは「基礎的理解 (elementares Verstehen)」であり、この理解は生が何らかの形で表現された「客観態 (Objektivierung)」において、表現と表現されているものとの関係が自明なものとして、あらかじめわれわれに理解されている状態を指す。例えばわれわれは、住み慣れた生活環境の中で、特定の事物や人物、文化財や習慣や制度などについてある一定の理解を持っている。この場合これらの客観態は、それについてわれわれが持っている理解の「共通性 (Gemeinsamkeit)」に基づいて理解されている。言い換えれば、この共通性によって個人と個人とは結びつけられ、客観態についての相互理解が可能となるわけである。「[個人という] 諸々の生の統一体が持つ共通性は今や、精神科学における特殊なもの一般的なものとの関係すべてに対する出発点となる。精神的世界の把握全体を、そのような共通性の基本的経験が貫いており、この共通性において統一的な主観の意識と他者との同質性の意識が、また人間性の自同性 (Selbigkeit) と個別性とがたがいに結びつけられている。理解の前提を成すのは、この共通性なのである」(VII141)。つまり理解の共通性とは、個別のものを全体的なものへと結びつけている理解の前提であるが、しかしこの共通性は基本的理解の段階では自明なものとして意識されない。それが意識されるのは、客観態の理解において表現と表現されている

ものとの間に「内的な隔たり」、つまり理解困難な状態が生じた場合である。この場合われわれは自己の体験の狭さを意識せざるをえず、他の諸々の客観態との連関に意識的になり、より広い連関を探っていかなければならない。デイルタイはこのような生の連関全体へと進んでいく理解の形式を、「高次の理解 (höheres Verstehen)」(VII 210)と呼んでいる。このような理解によって、理解の共通性における個別的なものと全体的なものとの関係が構造的に解明され、個別的なものそれ自体が持つ「自己価値 (Selbstwert)」が明らかになる。デイルタイは高次の理解の本質を、このような個別的なものの理解に求めている。「理解は常に、個別的なものをその対象とする」(VII 212)。

われわれはここで、デイルタイが明らかにした理解の二つの形式に即して、先に述べた個人的生活経験と一般的生活経験との関係について考えてみよう。個人的生活経験は一般的生活経験の影響を絶えず受けているが、この関係は普段は理解の共通性として、意識されることはない(基礎的理解)。両者の関係が意識されるのは、この理解の共通性に疑問が生じ、それが検討される場合である(高次の理解)。この場合個人的生活経験と一般的生活経験とは、初めて対立的なものとして捉えられることになる。つまり高次の理解において初めて、形而上学的エートスと概念的思考の対立が明らかなるものとなるのである。そこでは個人的生活経験が意識されるとともに、一般的生活経験に対する批判的態度が可能となる。このことは、個人的生活経験が一般的生活経験において「是正拡大される」(デイルタイ)と言うよりも、個人的生活経験が一般的生活経験において追体験され、追構成されると言った方が、より適切であるように思われる。デイルタイにとって、形而上学的エートスから概念的思考への段階的移行という哲学的前提があったために、個人的生活経験と一般的生活経験との関係は、個人的生活経験から一般的生活経験へ至る生の連関の拡大と一般化ばかりが強調され、この過程における両者の対立関係については(個別的なものの理解として、その重要性には気づきながらも)詳細な考察へと進むことはなかったのではないか。こうしてデイルタイ晩年の哲学は、普遍史的連関の認識(精神史)とその基礎づけの方法へと向かっているように思われる。

しかし哲学的思考において、形而上学的エートスと概念的思考が本来対立するものであり、世界観も精神科学もこの対立から同時的に成長してくるものとすれば、われわれはデイルタイがたどった哲学の道について、別の見方をすることも可能であろう。それは現代において細分化し、それぞれの関係が見えにくいものとなってしまった諸々の哲学的立場、芸術、宗教、精神諸科学などの諸成果を、もう一度それらが生じてきた生活経験(理解の共通性)へと連れ戻すことによって、個人的生活経験の意味を追体験し、追構成していくということである。哲学が人間個人に対して果たすこのような役割については、デイルタイが哲学の機能について述べる際に、すでに自覚していたことであった。「したがって哲学は、広大な生の表出が諸科学の中に反映されてきた限り、これら生の表出をその素材とする。哲学は生の表出によって、人間精神それ自体の連関と、またその自然への関係を認識へともたらす。自然認識や法律などにおいて、つまり精神の諸々の創造物から科学の中に反映されてきた限りにおいて、哲学はそれが生じてきた生の連関のつながりを回復する。科学的思考へと高める人間の諸関連が、この生の連関へと引き戻され、ひとつの統一が生じることを認め、この統一において個人が自律的で自発的な活動性へと自由に、そして同時に完全に形成される限りにおいてのみ、この諸関連は哲学に属している」(VIII 186)。このようにデイルタイにとって哲学とは、個人の生を自律的で自発的な活動性へと導くものである。このことを可能にするための方法論的基礎を、デイルタイの哲学は現代のわれわれに示唆しているのではないだろうか。

註

- (1) Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd.V, S.9. 以下デイルタイ全集からの引用はすべて、本文中に巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示すことにする。なお全集の中で邦訳が存在するものについては、以下のものを参考にした。山本英一・上田武訳『精神科学序説 上・下巻』(以文社、1979年)；尾形良助訳『精神科学における歴史的世界の構成』(以文社、1981年)；久野明監訳『世界観学』(以文社、1989年)。
- (2) H.-G.Gadamer, *Wahrheit und Methode*, Tübingen 1990, 6. Auflage, S.241.
- (3) O. F. Bollnow, *Neue Aufgabe der Dilthey-Forschung*(Manuskript), S.13. なおこの邦訳は、日本デイルタイ協会『デイルタイ研究』第1巻、1987年、1—20頁に掲載されている。
- (4) J. Habermas, *Erkenntnis und Interesse*, Frankfurt am Main 1994(Suhrkamp-Taschenbuch Wissenschaft; I), S.224. 邦訳、奥山次良他訳『認識と関心』、未来社、1984年。
- (5) この二つの課題とデイルタイの教育学との関係については、拙論「デイルタイの教育学と哲学—生の解釈学としての陶冶論」(『別府大学紀要』第40号、1998年、129—140頁)参照のこと。
- (6) この純粋な記述分析の方法が、フッサールの『論理学研究』に影響されたものであることを、デイルタイ自身が告白している(Ⅶ14)。しかしこの方法はまた、デイルタイが中期に意図していた「認識論的論理学」の構想—体験から思考が生じ、思考の規則や形式が展開してくる過程の発生的考察—を放棄するものでもあった。このことについては、次の文献を参照。ボルノウ、高橋義人訳『デイルタイとフッサール』、岩波書店1986年、83頁。
- (7) このような関係から、『諸研究』においては意識と体験とは時に区別なく用いられている。「心的諸対象についての知識すべては、体験に基づいている。体験とはまず、態度の在り方(Verhaltensweise)と内容との構造的統一である。私の知覚的態度は、その対象への関係も含めて、あることについての私の感情や意欲と同じようなひとつの体験である。体験は常にそれ自体で、確実なものである。今や体験は心的諸対象についての私の知識の連関全体に対する正当な根拠を築くので、体験をそこに含まれている確実性に関して分析しなければならない。ある赤ないし青という内容と、その赤の把握と満足というような態度は、私に対してそこにある。この私に対してそこにあるということ(für-mich-Da-Sein)は、意識していること(Bewußt-Sein)あるいは体験として特徴づけられる—もしこの語が生経過それ自体よりも、むしろこの生の経過がそこにある在り方として受け取られるとしたらである」(Ⅶ25f., Vgl.Ⅶ44)。
- (8) 「さて体験に関する概念形成は、その歴史的発展において同時に理解に基づいているが、この理解は再び体験へと週及的に基礎づけられている。この複雑な関係は、心的連関の把握に対する体験の関係を明確にするため、ここでは度外視しなければならない」(Ⅶ27)。
- (9) この一般的生活経験の形成について、デイルタイは次のように述べている。「個人間の連鎖において、一般的生活経験が生じる。個々の経験の規則的反复から、人間が共存し連続していく中で、この反复に対する諸々の表現の伝承が形成される。そしてこれらの表現は時間の経過の中で、ますますより大きな厳密性と確実性を得ることになる。それらの確実性は、われわれの推論のもとである諸々の事例の数が増加していき、これらの事例が現存する事例の一般化に属しており、絶えざる検証にあることに基づいている。そしてまた、個々の事例において生活経験の諸命題が必ずしも明白に意識されていないところでも、これらの命題はわれわれに作用している。風俗や習慣や伝統としてわれわれを支配しているものはすべて、そのような生活経験に基づいている。しかしながら個々の経験並びに一般的生活経験において、それらの確実性の種類と定式化の特徴は、科学的な普遍妥当性とは常に全く異なっている」(Ⅶ79f., Vgl.Ⅶ132f.)。
- (10) G. Misch, *Vom Lebens- und Gedankenkreis Wilhelm Diltheys*, Frankfurt am Main 1947, S.29.
- (11) Misch, a. a. O., S.32, Vgl.V116.
- (12) デイルタイは、作用連関としての哲学の諸機能の構造的な法則性の複雑さについて、次のように述べている。

「この機能が働いている連関は、あらゆる偉大な目的連関と同様、法則的なものである。歴史の一般的な経過において諸法則を探すことは、無駄である。しかしながら同様に、次のこともまさに明白であろう。つまりあらゆる目的連関が、まさにそれ自体において法則性の諸契機を持つということである。その法則性の第一のものは、内的な成長であり、それによって基礎科学、諸科学の組織化、形而上学の展開とそれ自体の解体、そして最終的には世界観と形而上学についての歴史的意識が展開される。第二の法則性は、これら哲学のさまざまな部分の同時的な成長である。この成長は、哲学の諸部分がそれらの機能において総括されることから生じる。第三の法則性は法則的な諸形式であり、諸々の世界観の混乱はこの諸形式へと、継続的な段階を踏んで秩序づけられ得るものである」(Ⅷ219)。

(13) Misch, *Lebensphilosophie und Phänomenologie*, Stuttgart 1967, 3. Auflage, S. 287.

(14) Misch, a. a. O., S. 309f.

(15) Misch, a. a. O., S. 312.

(16) Misch, a. a. O., S. 313.

(17) デイルタイは精神科学の基礎づけのために、形而上学批判から出発することによって形而上学から自由になったが、このことは同時に哲学において、その一方の起源である形而上学的エートスを過小評価することになったとも考えられる。このことによって哲学は、概念的思考の力が過大評価され、それは精神科学に内在していると見なされる。こうしてデイルタイは、精神科学から哲学全体の基礎づけ(作用連関)へと向かっていったと言える。このように科学に哲学的精神が内在し、哲学が諸科学を組織づけるという考えは、ミッシュによれば形而上学が解体した後での哲学に対する当時の一般的な見解であった。Vgl. Misch, a. a. O., S. 285f., V, X VI · X VIII。

Zum Problem des „Doppelantlitzes“ der Lebensphilosophie

—Der Charakter des philosophischen Denkens Diltheys—

Masaya Setoguchi

Diese Abhandlung versucht, die Entwicklung der Lebensphilosophie Diltheys unter den Gesichtspunkt des seinen philosophischen Grundproblems „Doppelantlitzes des Lebens“ zu untersuchen, um die Lebensphilosophie Diltheys neu zu bewerten. Dilthey charakterisiert den Gegensatz zwischen der allgemeingültigen Erkenntnis der Welt und der historischen Relativität der Weltanschauungen als das Problem des „Doppelantlitzes des Lebens“. Die Überwindung des Gegensatzes hat er sein ganzes Leben lang studiert. Um den Gegensatz aufzulösen, haben seine Studien zu der erkenntnistheoretischen Grundlegung der Geisteswissenschaften geführt, während sie zu der Weltanschauungslehre geführt haben. In seinen letzten Lebensjahren hat er die Meinung, daß sowohl die Objektivität der Geisteswissenschaften wie auch die Mannigfaltigkeit der Weltanschauungen nach der hermeneutischen Methode auf dem historischen Wirkungszusammenhang des Lebens gegründet sind. Die Meinung setzt aber voraus, daß die ursprüngliche Verbindung des metaphysischen Ethos mit der Kraft des begriffen Denkens im philosophischen Denken als eine Beziehung des Übergangs erscheint. Wenn die Beziehung zwischen den beiden nicht der Übergang sondern nach der Meinung Misches der gleichzeitige Gegensatz wäre, so dient die Philosophie dazu, in den Auslegungen der Objektivationen des Lebens die Lebenserfahrungen als die Grundlage der Geisteswissenschaften und der Weltanschauungen nachzuerleben.